金剛寶戒寺便

令和二年二月一日発行　第七十一号
https://www.houkaiji.jp

檀信徒の皆さま、こんにちは。暦の上では春になろうとしています。この宝戒寺便りは早朝に書くことが多いのですが、やはり例年よりも暖かさを感じています。

さて、一月二十三日には当山中興四十二世尊照大和尚の三十三回忌を行いました。尊照大和尚は私から見たら祖父に当たります。しかしながら私は僧侶としての祖父を知りません。もちろん衣を着ていた姿は覚えているのですが、それがリアルな姿として認識をしているのか、写真を通して記憶に残っているのかは確かでありません。

祖父は五人兄弟の末っ子の長男で、大正二年の生まれですから、きっと今では考えられないような亭主関白だったかもしれません。けれども私の覚えている祖父は物静かで優しく、お酒が好きな人でした。その頃わたしはまだ千葉に住んでおり、冬休みなどに帰省をすると、杉乃井ホテルへ温泉に連れて行ってくれたのが嬉しかった記憶として残っています。

私が月忌に伺い始めた頃は檀家さんとの会話の中にも祖父の話がよく出てきました。大柄で鼻が高く、俳優の様な人だった聞かされました。それは私のイメージの中での祖父とは違っていたのですが、今回、大楽寺の御住職様に当時の写真を持って来て頂き、見てみると確かに大作りな顔で、一目で見て判る堂々とした姿でした。その写真には当時の他のお寺のご住職さんも写っています。ほとんどの方が名前も知らない人だったのですが、現在の住職の顔を思い浮かべながら見ると、何処のお寺の住職かが分かりました。血の繋がりの強さに驚くと共に、少しだけ誇らしい気持ちにもなりました。

三十三回忌の法事と言っても先師忌ですので、お坊さんだけで総勢十四名なります。親族の中に僧侶もいますので、親戚は多くありませんが、総代様にも参列を頂きました。予報では一日中雨でしたが、不思議な程に晴れ、寒さも和らいだ中での法事となりました。

祖父が住職になったのが昭和十二年です。先代の住職が生まれたばかりで、年齢もわずかに二十四才でした。どこの家も今よりも貧しく、当山の本堂も今の本堂を建てる前のお堂です。学生時代は不自由なく仕送りをもらっていたそうですが、住職としてお寺に戻った時には本堂に座布団が一枚しかなかったとも聞いています。戦前、戦中、戦後を乗り切り、高度経済成長期の中、今のお寺の礎を築いてくれました。その様な意味では今の私などは先代、先々代の住職の上にあぐらをかいて座っている様なものです。

テレビも電話も無く、月忌にも自転車で廻っていた時代です。少し想像をしただけでも時代の移り変わりに驚くばかりです。お斎の最後には総代の徳丸さんからご挨拶を兼ねてお寺と檀信徒の絆の深さ、実直さも聞かせて頂きました。縁とは命の集積であり、常日頃から目には見えにくい様々なものに守られているという事に改めて感じる事が出来る三十三回忌となりました。

今年も巡回布教を行います。

日時　三月八日（日曜日）十四時から
演題　「幸せになる為に」
講師　高野山　本山布教師
　　浄真寺　住職　野﨑　公照　僧正様

野﨑公照僧正は高野山大学社会福祉学科卒業後、高野山大師教会本部布教研修生を経て平成十二年に山口県下関の真浄寺住職に就任されています。年齢は私よりも一つ若いですが、住職歴は私よりもずっと長いです。檀家様に限らず、ご家族お友達をお誘いの上お参り下さい。

一月の講習会はおなじみの矢野大和さんのお話でした。生涯現役、常に勉強で教養と教育（今日、用がある。今日行くところがある）が大切であること。元気だから出掛けるのではなく出掛けているから元気でいる事ができる。と笑いを交えながらお話しくださいました。お寺がそんな場所でありたいと願っています。今年も一年、笑顔が絶えない日常となりますようにお祈り申し上げます。

合掌